

特集

平安文学の中の天変 ～安倍晴明とかぐや姫～

作花一志（京都情報大学院大学）

1. はじめに

日本文学の中には星や月を扱ったものは少なく、代表的な平安文学である『源氏物語』にも『枕草子』にもただ言葉しか出てきません。百人一首には月を詠んだ歌は 11 首ありますが、星という文字は現れません。『明月記』以外に数少ない天文記事を扱った文学作品として『大鏡』と『竹取物語』を紹介します。

2. 安倍晴明の見た天変

「帝おりさせ給ふと見ゆる天変ありつるが、すでになりにけりを見ゆるかな。参りて奏せん。車にさうぞくせよ」。

これは高校古文の教科書に載っていた（る？）『大鏡』中の有名な文章ですが、事件の背景を知らずにただ文法に従って現代文に訳しても何も面白くありません。花山天皇が退位出家するとき深夜御所を抜け出し晴明の邸の前を通った、その時晴明が叫んだ言葉です。

安倍晴明に関する天変の中で、日付が確定しており最も有名なのが寛和二年六月二十二日（ユリウス暦 986 年 7 月 31 日）の花山帝退位事件です。ころは平安中期、他氏を排撃し朝廷の高位高官を独占した藤原氏は陰謀による仲間同士の骨肉の争いをうち広げていきます。そして「戦」にも「乱」にもよらず、摂関政治を確立していった総仕上げの事件がこれなのです。これを企画・総指揮をする右大臣藤原兼家（929-990）は、娘詮子が円融天皇との間に生んだ懐仁（やすひと）親王を帝位に就けるため、花山天皇（968-1008：在位 984-986）を退位させようと企みます。彼には 4 人の息子がいますが、ここで暗躍するの

は三男道兼です。帝はまだ 19 歳、とても退位する歳ではありませんが、道兼と一緒に出家しようかと誘われ夜半、御所を抜け出し、東山の花山寺（元慶寺：山科区北花山）に着きます。ところが、すでに頭を丸めてしまってから花山法皇、だまされたことに気づいたけど、もはや遅し。翌朝七歳の懐仁親王は即位（一条天皇）、兼家は念願の外祖父となり、摂政に就任します。この事件は彼の陰謀クーデターといわれますが、むしろ一滴の血も流さずに象徴天皇制を確立したと評価されてもいいのではないのでしょうか。

『大鏡』には晴明は帝の退位を示す天変を見たと言われていますが、それに当たる天変とは何でしょうか

候補として「木星のてんびん座 α 星への異常接近」と「月によるすばる食」が挙げられています。そのどっちか、その謎を解く鍵は晴明が叫んだ時刻です。大鏡には帝が御所を出ようとしたときに 有明の月のいみじう明りければ・・・月の顔にむら雲のかかりて・・・から出発したと書かれています。旧暦二十二日ですから下弦の半月の出はほぼ 12 時前、東山から月が現れるのはそれより後、その時は煌々たる月明かりだった。暫くして月にむら雲がかってから帝は内裏を出たのです。土御門大路（現在の長者通り）を東進して西洞院の安倍晴明宅前を通りました。その時の晴明の叫びは多分 2 時過ぎでしょう。すでに木星はとっくに沈んでいますが、月は東天高く見えます。

そこで独断的解釈を・・・ベテラン観測家の晴明はすでに数日前から木星の犯が起ることもすばる食が起こることも予知していた。

彼はこの二つの天変がこの夜、起こることを帝に奏上すべきなのに、藤原兼家・道兼父子に密告した。彼らは大喜びで、帝に退位を強く勧めた。帝も星のお告げならやむなしとしぶしぶ出家を決意した。清明は予報が両方とも当たり、帝がすでに退位したのを確認してから役目上の義務として報告に行こうとした。そうならば清明はこのクーデターの加担者ではないでしょうか・・・さて真相は？[1]

3. かぐや姫が月に還った宵

竹の中から生まれたかぐや姫がお爺さんお婆さんに富をもたらし、わずか三ヶ月で美しい娘に成長し、十五夜の月に還っていくというお話はみんな知っています。実は『竹取物語』は童話でも空想物語でもなく反権力風刺小説なのです。原本は残っておらず、成立年・作者とも不明ですが『源氏物語』に「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」という文章があることから平安初期の作品であることは確かです。

物語は、かくや姫の出現と成長、5人の貴公子の妻問い、帝の求愛、月への帰還の部分から成り立っていますが、このうち5人の貴公子の妻問いについて詳しく書かれています。実はこの5人は実在人物ないしは確かなモデルがいるのです。しかも朝廷の高官です[2]。

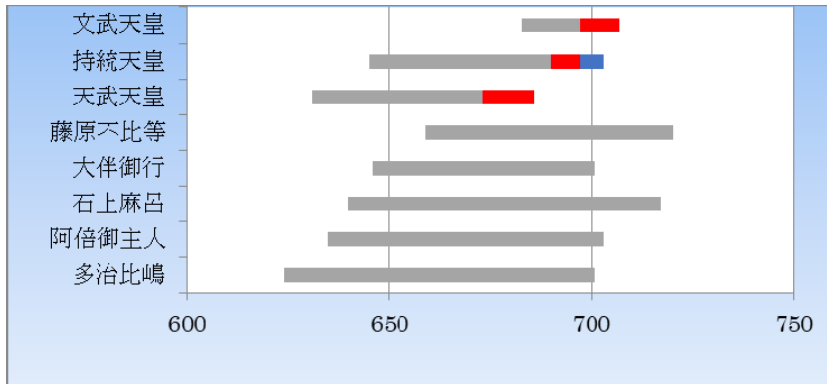
阿倍御主人（あべのみうし 635-703：右大臣）、大伴御行（おおとものみゆき 646-701：大納言）、石上麻呂（いそのかみのまろ 640-717：左大臣）は古代律令制が成立した飛鳥朝廷の高官です。阿倍御主人の子孫には安倍清明がいるし、大伴御行はもちろん大伴氏で、石上麻呂は物部氏の末裔です。石作皇子（いしづくりのみこ）のモデルは多治比嶋（624-701：左大臣）、車持皇子（くらもちのみこ）のモデルはなんと藤原不比等（659-720：右大臣）であることが、江戸時代からの研究でほぼ確定しています。かぐや

姫はこの5人に無理難題を吹っ掛け退散させ、この左右大臣を含む高位高官たちの失敗を嘲笑っているように見えます。さらに帝からの入内命令にも従わず、最後には朝廷から派遣された武力にも屈せず、この世で過ごしたことは忘れて、故郷の月へ還ってしまうというたくましい女性です。決してなよなよしいお姫様ではありません。彼女は天上で罪を犯し地上に遣られ、それが許され月へ戻るわけですが、これは左遷追放されたけど後年恩赦か何かで都に戻った公家のようなのです。そういえば光源氏も一時左遷されていますね。

この帝とは誰でしょうか？この5人が都で活躍する時の天皇は持統、文武ですが、持統は女帝だから除かれ、問題の帝は文武（在位697-707年）しかありえません。したがってかぐや姫が月へ還ってしまった宵は文武天皇が亡くなるまで、すなわち703年（大宝三年）～706年（慶雲三年）の中秋の名月となります。帝はかぐや姫がいなくなって病の床に伏し24歳で亡くなったと考えると、この中で最有力候補は没年の前年の中秋の名月である706年9月26日となります[3]。時は平城遷都前の飛鳥時代、絵物語に描かれているような十二単はまだないでしょう。

では『竹取物語』の作者は誰でしょうか？空海、源順、紀貫之、紀長谷雄、菅原道真・・・多数の候補者が上がっていますが、藤原不比等を嘲笑っているからには、藤原氏に恨みがあり、仏教・道教・漢籍・和歌などに精通している人でしょう。そこで紀貫之（866?-945?）が最有力候補になっているそうです。

余談ですが帝はかぐや姫からもらった不老不死の妙薬を駿河にある一番高い山の上で焼失するよう命じます。そして
焼きてけるより後は、かの山の名をは、ふじの山とは名づけける。いまだ、その煙、雲の中へたちのぼるとぞ、いひつたへたるで物語は終わっています。



4. その他

左大臣藤原頼長（1120-1168）の日記である『台記』には 1145 年のハレー彗星出現について詳しい記録が載っています。5 月 3 日から 6 月 18 日までほぼ毎日しかも非常に客観的です。彼は保元の乱の首謀者で謀反人扱いにされてしまいましたが、天文学には貢献しています。[4]

源平盛衰記には平氏が勝った唯一の源平の合戦である水島の戦い（1183 年）にこんな文章があります。

天俄に曇て日の光も見えず、闇の夜の如くに成たれば、源氏の軍兵共日蝕とは知らず、いとど東西を失て舟を退て、いづち共なく風に随つて遁行く 源氏の兵は突然起こった日食に驚き慌てて敗走した、しかし平氏は前から知っていました。この日食は 11 月 17 日真昼に起こった金環食で 光も見えず、闇の夜の如く とはオーバーな表現ですが。[5]

文 献

[1] 作花一志（2013）『天変の解説者たち』，恒星社厚生閣。

[2] 竹取物語

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AB%B9%E5%8F%96%E7%89%A9%E8%AA%9E>

[3] 作花一志（2010）「天文教育」Vol.22, No.6, p.42

[4] 長谷川一郎（1985）『ハレー彗星物語』，恒星社厚生閣。

[5] 斎藤国治（1982）『星の古記録』，岩波新書。



作花一志